

# 中学生の時間的展望と進路選択自己効力 —進路成熟態度別比較—

## Time perspective and career self-efficacy of junior high-school students —Comparison among career maturity attitudes—

矢田 智美\*・吉中 淳\*\*

Satomi YADA\*・Atsushi YOSHINAKA\*\*

### 論文要旨

中学生192名を対象に質問紙調査を実施し、進路成熟態度の高低により群分けして、各群において、時間的信念・時間的展望体験が進路選択自己効力に及ぼす影響を進路選択重回帰分析で検討した。その結果、将来無関心は成熟態度の低い群でのみ有意な影響が見られるなどのいくつかの群間差が見られた。

キーワード：中学生 時間的展望 進路選択自己効力 進路成熟態度

### 1. 問題と目的

近年、小学校、中学校、高等学校におけるキャリア教育の重要性が叫ばれている。中央教育審議会答申によればキャリア教育とは「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通してキャリア発達を促す教育」であると定義され、また、キャリア発達は「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程」であると定義されている(中央教育審議会,2011)。個人が自分らしい生き方を実現していくためには、児童・生徒のうちからどのような生き方が自分らしい生き方なのかについて考えを深めていくことが重要であるのは論を待たない。ただし、生き方を考えると言っても、中長期的に、学校を卒業した後どのように生きるかを考えるという問題と、短期的・具体的に在学中にどのように進路の課題に取り組むかという問題とは区別して考える必要がある。特に短期的な課題については、学校段階ごとに大きく様相が異なる。知的発達の水準や社会認識の深さも異なるといった事情を考慮に入れるならば、進路課題に対する望ましい取り組みの在り方には、発達段階に応じて様々な違いがあることも理解されなければならない。この点については、キャリア教育という言葉が盛んに言われるようになる

以前の進路指導においても、認識されていた。例えば、文部省(1984)によれば、進路に関する課題に関して、中学では「人生設計立案責任の受容」とされたものが高校では「好ましい生き方の自覚」となり、中学では「暫定的な進路計画の立案」とされたものが高校では「進路計画の再検討」となるなど、中学から高校にかけて課題の内容がレベルアップし、質的にも具体化・個別化が求められるようになっている。キャリア教育が前面に押し出されるようになった近年においても、中学では「進路計画の立案と暫定的な選択」とされたものが高校では「進路計画の立案と社会的移行の準備」「進路の現実吟味と試行的参加」となるなど、考え方は共通しているといえる。ただし、この内容で中学生の進路課題として難易度やその内容の質的妥当性については、実証的な根拠が積み上げられる必要はあるといえよう。また、これらの進路課題が妥当なものであったとして、生徒一人一人がその課題を達成するためにはどのようにしたら良いのか、その具体的な手立てについても考えなくてはならない。

中長期的に自分らしい生き方を考えるということと深い関係があるのが、時間的展望という概念である。白井(2002)によれば、時間的展望とは、ある一定の時点における個人の心理学的過去および未来について

\* 弘前大学大学院教育学研究科  
Graduate School of Education, Hirosaki University

\*\* 弘前大学教育学部学校教育(教育心理学)講座  
Department of School Education, Faculty of Education, Hirosaki University

の見解の総体をいい、いわゆる「見通し」を指し、広義には、個人の現在の事態や行動を過去や未来の事象と関係づけたり、意味づけたりする意識的な働きで、特に人生に関わるような長期的な時間的広がりのある場合をいう。白井は時間的展望を測定する尺度を開発してきた。その一つは時間的信念尺度（白井,1993）である。時間的信念とは「現在の行為と個人の未来の関係についての認知」であり、「現在の行為が未来を決定すると捉えているのか、未来と現在とを切り離して捉えているのかに関する個人の信念」と言い換えることができる。もう一つが時間的展望体験尺度である。白井（1994）は、「過去・現在・未来を区別した上で、それが相互にどのように関連しながら現実の行動に影響を及ぼしているのか」という問題意識のもとに、これまでの研究から「現在は充実、過去は受容、未来は希望と目標指向性」という4つの側面からなるというアイデアのもとに尺度を開発している。

一方、比較的短期的なスパンから、将来にむけて行動を制御するということと関連がある概念として、Banduraの提唱した自己効力（self-efficacy）がある。これは、「ある結果を生み出すために必要な行動を自分がどの程度うまくできるかという達成可能感」（Bandura,1977）と定義される。特定の課題に対して、個人がその課題に取り組んだ場合、どのような結果をもたらすかを表すという結果予期といった側面や、個人が自分はその課題をうまく遂行する能力があると感じる能力予期といった側面によって特色づけられる。Taylor & Betz（1983）は進路選択という課題を対象とする自己効力、すなわち進路選択自己効力の研究をはじめ、本邦では浦上（1996）を初めとして多数の研究が行われており、富永（2008）はその研究の現状をレビューしている。浦上によると、自己効力を取り上げるメリットは、介入研究との親和性である。つまり、自己効力に介入し、それを変化させることによって望ましい進路選択行動が生起すると考えられるのである。実際、浦上（1996）は大学生を対象に、ワークブックを作成して、自己効力の改善を図ることで進路選択行動に変化を起こすことを試みている。

ただし、本邦で行われている研究の多くは、大学生や高校生を対象としたものであり、中学生を対象としたものは近年には坂柳・清水（1990）や下村（2007）などがあるものの少ない。これは、大学生の場合、進路選択課題を就職活動などの具体的な課題に落とし込みやすいのに対して、中学生にはそれが難しいとい

うことも一因であろう。長谷川（1995）は、中学生用進路決定に対する自己効力尺度を開発したが、富永（2008）によると、その後、これを参考にした研究では研究ごとに因子構造が異なるなど一貫した結果が得られていない。浦上（1993）や長岡・松井（1999）は、進路選択自己効力と進路成熟との間に相関があることを示しているが、中学生は進路成熟が進んでいないため、進路選択自己効力が進路選択行動に対するリリバントな変数となり得ていない可能性もある。

以上のように、過去の研究からは、長期的なスパンから進路について考える時間的展望からのアプローチと、比較的短期的なスパンで目の前の課題について考える自己効力からのアプローチとがともに重要であることが示唆されているが、中学生という発達段階では、これらのアプローチが有効になるための前提条件が満たされていないこともまた同時に危惧されているといえる。そこで、本研究では、中学生を進路成熟の水準によって区分し、両者の間で、時間的展望と進路選択自己効力との間の関連の様相が異なるかどうかを探索的に検討する。素朴に考えれば進路成熟が進んでいる者の場合、長期的な展望と目の前の課題とが密接に関連することが期待されるが、進路成熟が進んでいない者の場合には、たとえ長期的な展望を持ったとしても、それは観念的なレベルに留まり、具体的な進路課題に対する自己効力とは関連が薄いのではないかということが予想される。また、先に浦上らが述べているように、介入研究との親和性が自己効力をとりあげることのメリットであるが、中学生に適用する場合には、ある程度進んだ進路成熟や時間的展望を持つことが、自己効力を使った介入が効果を挙げるための前提となっていることも予想される。本研究は、この点について、具体的に、どのような進路成熟や時間的展望を持つことが前提条件なのかについて、示唆を得ることも目的とする。

## 2. 方法

### 2.1 実施期日と調査対象

青森県H市にある公立中学校の2年生を対象にして、2013年7月上旬にクラス単位に質問紙を配布した。調査対象者数は、男子98名、女子94名、総数192名であった。

### 2.2 質問項目

#### (1) 進路成熟態度尺度（CMAS-4）

進路成熟を測定する尺度として、進路成熟態度尺度（CMAS-4）を用いた。この尺度は、坂柳と竹

内による研究の中で改定が重ねられているものであり(竹内・坂柳,1982,1983;坂柳・竹内,1985,1986)、本研究ではそのうちのCMA S-4(坂柳・竹内,1986)を用いた。この尺度は進路成熟の感度的側面に焦点を当て、教育的進路成熟(主に進学に関するもの)と職業的進路成熟の2側面を分けて測定するものである。この尺度は、両側面において、進路自律度、進路関心度、進路関心度の3分野について測定する。各下位尺度は5項目から構成され、それぞれ3件法で回答を求めた。

#### (2) 時間的信念尺度

時間的信念を測定する尺度として、時間的信念尺度(白井,1991)を用いた。時間的信念とは、時間的展望に対する個人の価値体系をいう(白井,1991)。時間的信念は、個人や自己や他者の時間的展望を評価する際に、その評価を方向づける働きを持ち、現在の行為と個人の未来の関係についての認知を問題としている(白井,1993)。質問は、将来無関心(6項目・現在重視(3項目)・満足遅延(3項目)の12項目で、「賛成」「やや賛成」「どちらともいえない」「やや反対」「反対」の5件法で行った。

#### (3) 時間的展望体験尺度

中学生の時間展望を測定するため、白井(1994)による時間的展望体験尺度を用いた。もとの尺度は、目標指向性(5項目)、希望(4項目)、現在の充実感(5項目)、過去受容(4項目)の4領域18項目で構成されていた。本研究では、「過去受容」の領域を除き、3領域14項目で実施した。各質問項目へは、「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の5件法で回答させた。

#### (4) 進路課題自信尺度

進路選択に対する自己効力感の測定を行うために、坂柳・清水(1990)の進路課題自信尺度12項目を用いた。本尺度は、調査時点における個々の進路選択課題に対する自信の程度を進路選択に対する自己効力感として操作的に捉えて測定するものであり、中学生の進路に対する自己効力感を「教育的」「職業的」「人生的」進路課題の3側面から測定する。具体的には各領域4つの課題項目(①情報収集、②目標と計画、③決定、④適応)を提示して、それぞれ「自信がある」「やや自信がある」「どちらでもない」「あまり自信が

ない」「自信がない」の5件法で回答させた。

以上の項目のほか、高校卒業後の進路、就きたい職業はどの程度決まっているか、希望する職業の仕事内容について知っているという自信についても併せて尋ねた。

### 3. 結果

#### 3.1 基本情報

高校卒業後の進路として就職のみを検討している者は19名(9.9%)で、147名(76.5%)は大学、短大、専門学校などへの進学を検討していた。

将来希望する職業は、一つに決めているという者は36名(18.8%)、いくつか候補があつて順位も決まっているという者36名(18.8%)、いくつか候補があるが順位は決まっていないという者は67名(34.9%)、決まっていないという者は51名(26.6%)であった。

希望する職業の仕事内容について知っているという自信については、とても自信があるという者15名(7.8%)、少し自信があるという者69名(35.9%)、あまり自信がないという者79名(41.1%)、全く自信がないという者24名(12.5%)であった。

#### 3.2 各尺度について

進路成熟態度尺度についての平均値、標準偏差、中央値、信頼性係数について表1に示す。坂柳・竹内の3分野のうち、進路自律度については、教育的側面においても、職業的側面においても信頼性係数(クロンバックの $\alpha$ )の値が低かったので以降の分析からは除外することとした。それ以外の計画度、関心度の2分野の信頼性係数は.7以上の値であったので、内的一貫性があるものとみなした。分析対象とした分野の項目については中央値で分割した結果、高群、低群に分類された者の人数についても併せて示す。

時間的信念尺度を主因子法・バリマックス回転により、因子分析を行った結果を示したものが表2である。固有値が1を割り込むところで因子抽出を打ち切った結果、白井(1991)とは異なり、2因子が抽出された。第1因子は、白井の刹那主義(将来無関心)とほぼ同じ項目であったので、「将来無関心」因子と命名した。第2因子は、白井(1991)では、「現在重視」「満足の遅延」という二つの因子に該当するが、内容から現在だけ、または将来だけを重視しているという訳ではないと判断されたので「将来と現在の関連づけ」因子と命名した。

表1 進路成熟態度尺度についての諸元

	M	SD	$\alpha$	中央値	Low 群	High 群
教育的進路自律度(ECA)	5.90	1.77	.59	6	—	—
教育的進路計画度(ECP)	5.83	2.52	.74	6	81	110
教育的進路関心度(ECC)	6.27	2.33	.73	6	101	89
職業的進路自律度(OCA)	6.49	1.77	.62	6	—	—
職業的進路計画度(OCP)	5.31	2.69	.77	6	94	97
職業的進路関心度(OCC)	7.09	2.15	.71	7	100	90

表2 時間的信念尺度の因子分析結果

項目	因子1	因子2
どうなるかわからない先のことを考えても仕方がない	.770	.065
今が楽しければそれでよい	.675	-.088
将来のことをいちいち考えてそれにしばられるのは不自由だ	.636	-.028
無理に見通しを持つ必要はない	.630	.027
先がわからないなら、わからないまま生きる道はある	.587	-.102
それが将来に役に立つかどうかより、することが楽しいかどうか大切だ	.558	.115
今が大切にできないで将来が大切にできるはずがない	.030	.687
二度と来ない今が大切だ	-.017	.685
生きている実感のある今の瞬間が一番大切だ	.187	.657
今していることの価値は将来になってわかるものだ	-.062	.657
自分の夢の実現のために頑張るのが人生だ	-.032	.594
今がなくても将来のためなら我慢するべきだ	-.112	.525

※因子1…将来無関心因子

※因子2…将来と現在の関連づけ因子

表3 時間的展望体験尺度の因子分析結果

項目内容	因子1	因子2	因子3	因子4
私にはだいたいの将来計画がある	.843	.283	.031	.091
将来のためを考えて今から準備していることがある	.764	.185	.070	.024
私には、将来の目標がある	.688	.210	.085	.024
私には未来がないような気がする (逆)	.216	.624	.214	-.012
将来のことはあまり考えたくない (逆)	.313	.558	.126	.081
私の将来には、希望が持てる	.159	.545	.004	.237
10年後、私はどうなっているのはよくわからない (逆)	-.081	.542	.275	.417
自分の将来は自分でできりひらく自信がある	.144	.391	.046	.212
私の将来は漠然としていてつかみどころがない (逆)	.103	.333	-.029	.069
毎日の生活が充実している	.072	.061	.868	.169
今の生活に満足している	.062	.022	.763	.273
今の自分は本当の自分でないような気がする (逆)	.043	.088	.303	.121
毎日がなんとなく過ぎていく (逆)	.099	.243	.160	.764
私は、自分の過去を受け入れることができる	.034	.131	.281	.626
毎日が同じことのくりかえしで退屈だ (逆)	.014	.136	.253	.493

※因子1…目標指向性因子

※因子2…希望因子

※因子3…現在充実因子

※因子4…現状肯定因子

時間的展望体験尺度を主因子法・バリマックス回転により、因子分析を行った結果を示したものが表3である。第1因子は、すべて白井(1994)の目標指向因子に含まれる項目であったため「目標指向」と命名した。第2因子は、白井(1994)の「希望」因子に含まれる項目が大半であったため「希望」と命名した。第3因子と第4因子は白井(1994)の「自己充実」にあたる項目が二つの因子に分かれたもので、第3因子を「現在充実」因子、第4因子を「現状肯定」因子と命名した。

進路課題自信尺度は、これを開発した坂柳・清水(1990)は、3側面4課題ずつからなる課題としたが、主因子法による因子分析を実施したところ、1因子抽出により、分散の45%が説明され、表4に示すように、各項目の因子負荷量も.56以上と高く、また、合計得点の信頼性係数を求めたところ、クロンバックの $\alpha$ の値が、.90と極めて高いため、1因子構造を為しているとみなし、これらの項目の合計点を進路選択自己効力の指標と見なすこととした。

表4 進路課題自信尺度の因子分析結果

項目名	因子負荷量
人生での目標や計画をはっきりと立てること	.745
希望する職業を実現するための目標や計画をはっきりと立てること	.742
自分の人生や生き方を決めること	.716
自分に合う進学先を決めること	.705
人生や生き方を知るために必要な情報・資料を自分で集めること	.683
希望する職業を決めるのに必要な情報・資料を自分で集めること	.683
進路のための目標や計画をはっきりと立てること	.677
自分に合う職業を決めること	.661
就職した後、充実した職業生活を送ること	.645
進学した後、充実した学校生活を送ること	.629
充実した幸福な人生を送ること	.576
進学先を決めるのに必要な情報・資料を自分で集めること	.562

表5 進路課題自信尺度に関する重回帰分析の結果（全員対象）

	$\beta$	t	p
将来無関心因子	—	—	—
将来と現在の関連づけ因子	.197	3.173	.002
目標指向性因子	.292	5.037	.000
希望因子	.490	8.657	.000
現在充実因子	.160	2.683	.008
現状肯定因子	—	—	—
R <sup>2</sup>	.516		

3.2 時間的展望と進路選択自己効力との関連

時間的展望と進路選択自己効力との間の関連をみるために、進路課題自信尺度の合計得点を被説明変数に、時間的信念尺度と時間的展望尺度をそれぞれ主因子法・バリマックス回転することによって算出した因子得点を説明変数としてステップワイズ法の重回帰分析を行った結果が表5である。

最も標準偏回帰係数の値が高かったのは時間的展望体験尺度の希望因子であり、時間的信念尺度の将来無

関心因子と時間的体験尺度の現状肯定因子は分析から除外された。

進路成熟度の高低によって、時間的展望と進路選択自己効力との間の関連の様相が異なるかどうかを検討するために、教育的進路計画度（ECP）、教育的進路関心度（ECC）、職業的進路計画度（OCP）、職業的進路関心度（OCC）について、それぞれ中央値を境に高群と低群に分けて、それぞれ同様の重回帰分析を行った。結果を表6～9に示す。

表6 進路課題自信尺度に関する重回帰分析の結果

	(教育的進路計画度別)					
	教育的進路計画度低			教育的進路計画度高		
	$\beta$	t	p	$\beta$	t	p
将来無関心因子	-.275	-2.954	.004	—	—	—
将来と現在の関連づけ因子	.360	3.787	.000	.172	2.009	.048
目標指向性因子	—	—	—	.283	3.529	.001
希望因子	.429	4.491	.000	.472	5.905	.000
現在充実因子	—	—	—	.187	2.165	.033
現状肯定因子	—	—	—	—	—	—
R <sup>2</sup>		.476			.444	

表7 進路課題自信尺度に関する重回帰分析の結果

	(教育的進路関心度別)					
	教育的進路関心度低			教育的進路関心度高		
	$\beta$	t	p	$\beta$	t	p
将来無関心因子	-.181	-2.169	.003	—	—	—
将来と現在の関連づけ因子	.294	3.543	.001	—	—	—
目標指向性因子	.218	2.648	.010	.355	4.395	.000
希望因子	.499	5.949	.000	.481	5.975	.000
現在充実因子	—	—	—	.311	3.954	.000
現状肯定因子	—	—	—	—	—	—
R <sup>2</sup>		.514			.526	

表8 進路課題自信尺度に関する重回帰分析の結果

(職業的進路関心度別)

	職業的進路計画度低			職業的進路計画度高		
	$\beta$	t	p	$\beta$	t	p
将来無関心因子	—	—	—	—	—	—
将来と現在の関連づけ因子	.371	3.875	.000	.250	3.011	.003
目標指向性因子	—	—	—	.242	2.898	.005
希望因子	.384	4.011	.000	.564	6.891	.000
現在充実因子	—	—	—	—	—	—
現状肯定因子	—	—	—	—	—	—
R <sup>2</sup>	.359			.478		

表9 進路課題自信尺度に関する重回帰分析の結果

(職業的進路計画度別)

	職業的進路関心度低			職業的進路関心度高		
	$\beta$	t	p	$\beta$	t	p
将来無関心因子	—	—	—	—	—	—
将来と現在の関連づけ因子	.330	3.908	.000	—	—	—
目標指向性因子	.195	2.307	.024	.401	4.748	.000
希望因子	.526	6.476	.000	.459	5.471	.000
現在充実因子	—	—	—	.264	3.199	.002
現状肯定因子	—	—	—	—	—	—
R <sup>2</sup>	.479			.520		

すべての組み合わせにおいて希望因子の標準偏回帰係数が最も高くまた有意であった。また、将来と現在の関連づけ因子がすべての成熟度低群において有意であり、目標指向因子がすべての成熟度高群において有意であった。将来無関心因子が有意であったのは教育的側面における成熟度低群 (ECP, ECC) のみであり、現在充実因子が有意であったのは成熟度高群 (ECP, ECC, OCC) のみであった。目標指向性因子はほとんどの群で関連していたものの、進路計画度の低群 (ECP, OCP) では有意ではなかった。

#### 4. 考察

本研究は、中学生を進路成熟の水準によって区分し、両者の間で、時間的展望と進路選択自己効力との間の関連の様相が異なるかどうかを探索的に検討した。その結果、いくつかの点で時間的展望と進路選択自己効力との間の関連の様相が異なることが示唆された。まず、共通点を先に確認すると、全群で希望因子が有意であったことから、進路選択自己効力を持つということは、未来について考え、未来に対して明るい見通しを持つことが重要であることを示しているといえる。

一方で、成熟度の高さによって、いくつかの気になる相違点もある。まず、時間的信念因子が自己効力との間に有意な関連がみられたのは、ほぼ、成熟度が低い群に限られたということである。このことは、成熟度が高い群においては、将来に関心を持つこととか、将来と現在を結びつけて考えることは半ば当然のこと

であるため、進路選択自己効力との間の関連性が消失したのに対し、低い群においては必ずしもそうではなく、ばらつきがあったために、結果に有意な影響をもたらしたのではないかと考えられる。また、計画度の成熟度が低い群においては、目標指向性が進路選択自己効力に関連していなかったという点にも注目される。進路選択自己効力を持つためには、未来を「目標」という形に具現化することが必要で、そのためには計画度という分野において、ある程度の進路成熟の高さが必要とされているということを示唆するものとも考えられる。そして、最後に現在充実因子が進路選択自己効力に有意な影響を持ったのが進路成熟度の高い群に限られたということも注目したい。裏を返せば、進路成熟の低い群においては、将来のことを考えることと切り離された形で、現在が充実していると考えられているということになる。そのような状況が果たして持続しうるのかどうかについてはやや懸念される。

以上のような結果から、中学生において進路選択自己効力が効果を及ぼすための前提として想定されるのは、順に

- (1) 将来と現在は深く関連しているという認識
- (2) 将来のことを考える時、目標という観点から考えることの重要性

以上の2点については最低限、必要となるだろう。

それを踏まえて、何らかの目標を持っている生徒を対象に、特定の活動をすることが、その目標の達成につながる具体的な課題の達成につながるのだという認

識を持たせることができるのならば、進路選択自己効力や進路選択行動の向上につながることを期待される。また、時間的展望についても、単なる希望的観測であったものが、ある程度の根拠を伴った確かな確信へと変化することも考えられる。以上のような想定については、現時点ではややデータが不足している。今後の更なる調査研究や、実践研究による確証を待ちたい。

#### 参考文献

- Bandura, A. 1977 Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 194-215.
- 中央教育審議会 2011 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申) ぎょうせい
- 長谷川龍彦 1995 中学生用進路決定に対する自己効力測定尺度作成の試み 学校教育研究, 6, 31-47.
- 文部省 1983 進路指導の手引—高等学校ホームルーム担任編
- 長岡大・松井賢二 1999 大学生における進路選択に対する自己効力と進路(キャリア)成熟 進路指導研究, 20, 11-20.
- 坂柳恒夫・竹内登規夫 1986 進路成熟態度尺度(CMAS-4)の信頼性および妥当性の検討 愛知教育大学研究報告(教育科学編), 35, 169-182.
- 坂柳恒夫 清水和秋 1990 中学生の進路課題自信度と性格自己概念との関連 進路指導研究, 11, 18-27.
- 坂柳恒夫 1991 進路成熟の測定と研究課題 愛知教育大学教科教育センター研究報告, 15, 269-280.
- 坂柳恒夫 1992 中学生の進路成熟に関する縦断的研究 愛知教育大学教科教育センター研究報告, 16, 299-308.
- 坂柳恒夫 1993 高校生の進路成熟に関する縦断的研究 愛知教育大学教科教育センター研究報告, 17, 127-136.
- 下村英雄 2007 中学生におけるコンピュータを活用したキャリアガイダンスが進路自己効力感に与える影響 教育心理学研究, 55, 276-286.
- 白井利明 1991 青年期から中年期における時間的展望と時間的信念の関連 心理学研究, 62, 260-263.
- 白井利明 1993 時間的信念尺度の検討に関する研究 大阪教育大学紀要, 42, 51-57.
- 白井利明 1994 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究, 65, 54-60.
- 白井利明 2002 時間的展望の生涯発達心理学 勁草書房.
- 竹内登規夫・坂柳恒夫 1982 進路成熟態度尺度(CMAS-1)の作成と項目分析 愛知教育大学研究報告(教育科学編), 31, 193-210.
- 竹内登規夫・坂柳恒夫 1982 進路成熟態度尺度(CMAS-2)の作成と分析 愛知教育大学研究報告(教育科学編), 32, 193-210.
- Taylor, K.M. & Betz, N.E. 1983 Applications of self-efficacy theory to the understanding and treatment of career indecision. *Journal of Vocational Behavior*, 22, 63-81.
- 富永美佐子 2008 進路選択自己効力に関する研究の現状と課題 キャリア教育研究, 25, 97-111.
- 浦上昌則 1993 進路選択に対する自己効力と進路成熟の関連 教育心理学研究, 41, 358-364.
- 浦上昌則 1996 「進路選択に対する自己効力」の育成に関する予備的研究—ワークブックを用いた育成法について— キャリア教育研究, 17, 17-27.

(2014. 1. 14 受理)